

2025 年度 事業報告書

はじめに

1) 森を創るプロジェクト	1
2) 外国語電話相談	3
3) HIV 陽性者の個別支援	5
4) グループプログラム	9
5) 多言語支援	10
6) 関西学院大学留学生の生活医療支援	16
7) ネットワーク	17
8) 広報	17
9) 実習・研修受け入れ	18
10) 理事会	19
11) 会員総会	20
12) 事務局	20
13) 会員	21
14) 寄付者名一覧	21

特定非営利活動法人 **CHARM**
(Center for Health And Rights of Migrants)



はじめに

近年インターネットが一般市民の間にも普及したことにより来日前の HIV 陽性者が日本で治療を継続するための情報を求める国外からの問い合わせが年々増えています。

各地のエイズ拠点病院や日本ですでに生活している AIDS 患者(HIV 陽性者含む)、STDs(性的感染症)からの問い合わせの数の増加の傾向にあります。

CHARM は、正しい情報を提供するだけでなく、病院や行政手続きでの多言語通訳など、外国人を多角的にサポートしています。

これまでの活動の積み重ねが認められ、CHARM は 2025 年 3 月に大阪弁護士会「人権症」を受賞しました。これまで支えてくださった多くの方々・団体に感謝の意を示し、更なる連携を期待するとともに、関係者の皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

中萩エルザ(理事)

すべての人が
健やかに過ごせる
社会をめざして



● 2025 年度 CHARM 事業報告書

1) 森を創るプロジェクト

CHARM がこれまで 23 年間取り組んできた HIV は様々な側面を持っている。HIV 治療を行っている医療機関の中では医療従事者等の働きによりマイノリティに対する理解が徐々に進んでいるが、社会全体をみると、偏見が軽減されるどころかコロナ禍では新たな偏見が再生産された。CHARM は、偏見のない社会を創る働きかけが必要であると様々なマイノリティの課題に関わる支援者や当事者に呼びかけて共に学び、考える森を創るプロジェクト「排除と差別はどこから」を 2025 年度に開催した。このプロジェクトは、2024 年に CHARM が受賞した CCJA の賞金の一部を活用することで実現した。

1-1) 第 1 回：医療による排除と差別

日時：2025 年 5 月 31 日～6 月 1 日（宿泊研修）

場所：国立療養所邑久光明園(おくこうみょうえん)(岡山)

参加者：24 名(事務局を含む)



1 日目：邑久光明園園長の青木美憲さんから「ハンセン病の歴史と今」というテーマの講演をしていただいた。講演の後は園内を見学。夕方は CHARM 理事長の松浦基夫が「エイズに引き継がれた負の歴史」というテーマの講演。そのあとは交流会を行った。

2 日目：小グループに分かれ、日常の課題とのつながりを共有した。

1-2) 第 2 回：外国人政策による排除と差別

日時：2025 年 7 月 12 日 10:00～

場所：鶴橋周辺、在日韓国教会館

参加者：32 名



鶴橋からコリアンタウンの間の歴史と文化を知るために、商店街をぬけ御幸森天神宮へと、スタディーツアーからスタートした。途中、韓国料理屋で昼食を取って、在日韓国基督教会館に向かった。

午後はコリア NGO センターの郭辰雄さんから「第二次世界大戦後の外国人政策」の講演を聞き、そのあとはグループディスカッションで「私のアイデンティティ、私の特性、私のルーツ」を語り合った。

1-3) 第 3 回：家族主義による排除と差別

日時：2025 年 9 月 20 日 13:30～

場所：ドーンセンター

参加者：52 名



最終回の研修となる 3 回目は「性別とマジョリティーとマイノリティ」について産婦人科医の藤田圭似子さんからのお話からスタートした。そして、「家族に関する法律」—今も残る「家制度」と家族主義について—弁護士吉田容子さんからのお話があった。

後半は「ヒューマンライブラリー」という試みで、社会的マイノリティの人々を《本》に見立て、参加者は読者として《本》のヒューマンストーリーを聞いて少人数で対話をするというもので、7 人の方々が《本》となり、グループに分かれてそれぞれ 2 冊の《本》を読んだ。

1-4) 総括：振り返りの会

日時：2025 年 12 月 20 日 14:00～

場所：日本キリスト教団東梅田教会



3 回の研修の振り返りを実施した。研修に参加されたみなさんからの感想を共有し、今後の「森を創るプロジェクト」をどのような形で行っていくのか、そして CHARM に何を期待するのかについて、小グループ形式で行った。

今後はこの研修に参加した人が加入しているメーリングリストでの情報共有を継続し、新しいプログラムを参加者のみなさんと一緒に企画し、提案していくことになった。イベントや企画を検討する際、CHARMのホームページなど周知し、運営協力も参加されたみなさんにも積極的に関わっていただくことで合意し、2025年度の森を創るプロジェクトが終了した。

※第1回～3回の研修の詳しい報告は Charming Times No.28、振り返りの会は Charming Times No.29 にてご覧いただけます。

2) 外国語電話相談

2025年度は109年の電話相談があった(2024年度は131件)

言語別相談数は英語62件、ポルトガル語18件、日本語(外国人)9件、スペイン語8件、中国語6件、本人に代わって連絡のあった支援団体や代理の方が3件、日本語(ネイティブ)2件、医療機関1件であった。

言語の特徴としては、昨年度とほぼ同じような言語構成であった。

2025年度 対応言語及び件数

言語	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年間合計
英語	5	4	9	9	2	6	6	2	3	7	5	4	62
ポルトガル語	2	2	0	2	4	2	1	3	2	0	0	0	18
日本語(外国人)	0	0	0	1	3	0	2	0	0	2	0	1	9
スペイン語	0	0	0	2	2	0	0	0	0	2	1	1	8
中国語	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	1	6
支援団体/代理	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	3
日本語(ネイティブ)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	2
医療機関	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
合計	9	7	11	16	11	8	9	7	5	11	7	8	109

相談内容について、件数が多い順として「外国語の通じる抗体検査会場紹介」が**63**件、「HIV陽性者の社会福祉制度、病院紹介、医療費、薬価」**13**件、「HIV/STIへの不安、それに関する情報」**12**件、「HIV陽性者その他」**12**件だった。

相談内容の項目を今年度に変更したため、昨年度と単純に比較することができないものの、傾向として、上記の相談内容が多い順位は2024年度とほぼ同じであった。

2025年度 電話相談内容(複数回答あり)

内容	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年間合計
1. 外国語の通じる抗体検査会場紹介	3	5	9	8	3	6	7	2	3	9	4	4	63
2. 外国語の通じる医療機関の紹介	0	0	2	0	1	0	0	0	0	1	0	0	4
3. HIV/STIへの不安、それに関する情報	4	0	1	2	0	1	0	0	0	2	1	1	12

4. PWHA の行政手続きの方法	1	1	0	1	2	0	1	0	2	0	0	1	9
5. PWHA 症状、薬の副作用	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
6. PWHA 社会福祉制度、病院紹介、医療費、薬価	1	1	1	4	1	0	1	1	0	0	0	3	13
7. PWHA 不安、心理的問題	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	4
8. PWHA 海外の HIV 診療事情、受け入れ機関紹介	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9. PWHA その他	1	0	0	1	2	2	0	5	0	0	0	1	12
10. PWHA の家族、パートナー等	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	3
11. その他	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	10	8	14	18	11	9	9	8	5	13	7	10	122

・LINE による相談(英語)の実施

外国語電話相談の他に、LINE による相談(英語)を自主的に 2023 年 9 月より開始した。日本での電話番号の契約が難しく、電話番号を持たない外国人が増えていること、また来日前に日本での治療継続について不安解消や渡航準備などへの支援のために相談を行っている。

2025 年度は 77 件の相談があった(2024 年度は 56 件)。

LINE による相談(英語)件数は電話相談の件数より多くなっている。

また大きな特徴として、検査会場の紹介や性感染症の不安の件数が多く占める電話相談と異なり、LINE による相談の約 7 割が HIV 陽性者からの相談であった(相談内容項目 4~10 が HIV 陽性者に関連する内容である)。

なお、2026 年度には外国語電話相談事業の中に、LINE 相談を含むことが決定しており、英語のみならず、ポルトガル語、スペイン語、そして中国語による LINE 相談ができるようになる。より多くの方が自分がわかる言語でアクセスしやすく、相談でき、性感染症への不安解消や、来日する際に HIV 治療を途切れることなく、安心して日本で生活できるように、引き続きサポートしていくことになる。

2025 年度 LINE(英語)相談内容(複数回答あり)

内容	月													年間合計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
1. 外国語の通じる抗体検査会場紹介	1	1	1	1	2	0	1	0	2	1	0	0	10	
2. 外国語の通じる医療機関の紹介	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
3. HIV/STI への不安、それに関する情報	0	4	2	1	0	0	0	3	0	1	0	1	12	
4. PWHA の行政手続きの方法	1	0	0	0	4	1	0	0	2	0	0	0	8	
5. PWHA 症状、薬の副作用	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	
6. PWHA 社会福祉制度、病院紹介、医療費、薬価	0	1	2	0	6	4	5	7	2	2	0	0	29	
7. PWHA 不安、心理的問題	0	0	0	0	1	1	0	1	0	1	0	1	5	

8. PWHA 海外の HIV 診療事情、受け入れ機関紹介	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9. PWHA その他	1	2	1	2	6	6	0	6	2	4	3	2	35
10. PWHA の家族、パートナー等	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
11. その他	0	1	1	2	0	0	0	0	0	1	0	0	5
合計	4	10	8	6	19	12	6	18	8	10	3	4	108

3) HIV 陽性者の個別支援

CHARM が行っている HIV 陽性者支援事業は、厚生労働省、大阪府等の自治体からの委託事業として行っている。HIV 陽性者 1 人 1 人はそれぞれ固有の状況と必要を持っているため個別の支援である。そのために CHARM では、電話、メール、ホームページの中に設置した多言語の問い合わせフォーム、LINE など多様な相談の入り口を設けている。また支援の方法としては、対面相談や同行支援や医療通訳そして家庭訪問など状況に応じて必要に応じている。グループプログラムは、仲間同士が協力したり励まし合う場として定期的に行っている。日本社会でもっとも支援が薄い分野は、日本語以外の言語を母語とする人々であり、CHARM では 10 言語による情報の提供、16 言語による通訳支援、移住 HIV 陽性者が日本で安心して HIV 診療を受けることができるための継続的な支援を医療機関と連携して行っている。

3-1) 移住 HIV 陽性者支援

HIV は、1980 年代には感染が分かれば死を覚悟した疾患であったが、その後医療の発展により次々と新しい薬が開発され、副作用による体への負担も軽減された。初期の段階では薬を入手できる北の国々の人々のみが治療を受けることができたが、HIV 陽性者自身が中心となり南の国々で起こった運動とそれに共感した世界中の人々、そして国際機関の働きによって今では世界の多くの国と地域で HIV 治療が受けられるようになった。一方で、世界中で起こっている紛争や社会の不安定さにより自国を離れざるを得ない人や災害やその他の理由で家族が生きていくために海外で働かなければならない人、また国際的なビジネスに従事する人は国境を越えて移動している。その中には HIV のような慢性疾患を持つ人も少なくない。CHARM では海外から日本に移住する HIV 陽性者が治療を継続するための相談窓口を設けており、関西地域にとどまらず各地のエイズ治療拠点病院(以下、拠点病院)と連携して治療継続のサポートを行っている。

今年度、外国籍 HIV 陽性者またはその関係者からの新規相談 91 名、前年度以前からの継続相談 45 名、合計 136 名に対応した(表 1)。大阪府/大阪市から CHARM が受託している多言語電話相談事業で相談を受け、より専門的かつ継続的な支援が必要な場合は引き継いで対応を行った。また、HIV 陽性者等総合相談窓口 SO SO SO に入った外国籍 HIV 陽性者からの相談や海外での治療継続を希望する日本人 HIV 陽性者からの相談も引き継いで対応した。相談者 136 名の内訳は、日本での HIV 治療の継続に関する相談及び情報収集が 85 名、治療継続以外の日本での生活に関する相談が 46 名、日本以外の国における HIV 診療事情に関する相談が 5 名であった。連携した医療機関は 33 機関、支援機関は 6 機関であった。

日本での HIV 治療の継続に関する相談 85 名のうち実際に拠点病院につながるための支援を行ったのは 40 名、情報提供のみ行ったのは 45 名であった。昨年度から引き続き、関西圏以外に居住する外国籍 HIV 陽性者から相談があった際は拠点病院との受診調整等のコーディネーターは CHARM が行き、同行、通訳支援を現地の各団体に依頼した。治療継続以外の日本での生活に関する相談の内容は、HIV を理由に職場を解雇された者の継続した心的支援、HIV 陽性者は日本で就労/留学することができるか、近医で HIV 陽性が判明し紹介状を渡さ

れたがどうしたらいいかわからない、HIV 以外の疾患のため拠点病院以外を受診したい、在留資格についての相談などであった。日本以外の国における HIV 診療事情に関する相談は、5 名中 3 名が拠点病院の医療者から、2 名が医療機関から CHARM を紹介された当事者からの相談であった。

日本で HIV の治療継続を希望していた者の中には、母国で早期に治療を開始したためや、医療制度の違いによって日本で身体障害認定を受けることが難しい者もいた。(表 2)その中には途中で連絡が途絶えた者や、自身で抗 HIV 薬を調達するため拠点病院への受診を希望しない者もいた。3 月 16 日に「関西における来日 HIV 陽性外国籍者に関する検討会」(厚生労働科学研究事業 エイズ予防指針に基づく対策の評価と推進のための研究 分担研究 エイズ予防指針の国民理解および施策の効果のモニタリングに関する研究 分担研究者 公益財団法人エイズ予防財団 白阪琢磨)にて CHARM の受けた相談から移住外国籍 HIV 陽性者の現状を報告し、まずは大阪から医療者、行政と協力し対策を検討していくこととした。

月毎の相談者数：

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
新規	6	9	12	10	7	9	6	4	5	9	4	10	91
継続	21	14	13	16	20	14	16	18	20	18	19	19	208

※継続の合計数は延べ人数

エイズ治療拠点病院へつながるための支援を行った者の内訳：

項目	人数	割合(%)
身体障害者手帳を取得しスムーズに日本で治療が継続できた	15	37.5
母国ですでに治療を開始し身体障害認定を満たす血液検査の結果が無かった	25	62.5
a) 母国で治療を受けていた病院から抗 HIV 薬を送ってもらって治療を継続した	8	20.0
b) 海外のオンライン薬局から自己責任で抗 HIV 薬を輸入し治療を継続した	8	20.0
c) 一時的に治療を中断し、身体障害認定を満たすまで CD4 値を下げるかウイルス量を上げてから同手帳を取得し治療を継続した	5	12.5
d) 健康保険の高額療養費制度を利用して治療を継続した	3	7.5
e) 他団体へ紹介	1	2.5

3-2) 日本に在住する HIV 陽性者支援 全体の概要

3-2-1) 「SO SO SO」HIV 陽性者のためのメール相談

活動開始年：2021 年 10 月開始 HIV 総合相談窓口「SO SO SO」
活動内容： HIV 陽性者の方やパートナー、家族などのための無料メール相談
目的：
1) HIV で情報を得たい人や相談したい人が、時間に関係なくメールで相談することができ、問題解決に向けた一歩を進める一助とする。
2) CHARM で活動している専門家も含めた人々にその能力と才能をボランティアで発揮してもらい相談者のニーズに近い対応をチームで行う。
開催頻度：必要に応じて随時
登録プロボノ： 医師、薬剤師、臨床心理士、ソーシャルワーカー、看護師、陽性者の方など
委託元：厚生労働省 HIV 陽性者等の HIV に関する相談、支援一式

2025 年度 3 月迄の総合相談窓口「SOSOSO」に入った相談のべ件数は 85 件、新規件数 39 件、相談内容は 76 件(重複有)であった。内 5 件は外国人担当者へ廻した。メールのやり取り回数は多い方で 11 回であった。

コーディネーターはメールのやり取りで相談者の気持ちの整理を行い、問題点を明らかにして医療専門者に繋ぐことができた。専門者の返事はエビデンス、経験を含めた返答であり相談者は納得ができ安心したと返事が来ている。不安な気持ちに関しては、落ち着くまでメールでのやり取りを行い少し前に進める気持ちを創ることに努めた。

相談内容は、感染不安が多く全体の 28%を占めた。次いで、心的疲労 10.5%であった。相談内容には HIV 検査での精度について迅速抗原抗体検査、核酸増幅検査、第 4 世代核酸検査の確率について教えてほしい。無料検査を受け陰性であったが HIV1/2 の検査を日本では実施されているのかなど専門的な内容の質問や、風俗での性交後、感染していたら不安で眠れない。しかし無料検査を受けることも怖い。相談者は感染予防への認識が薄く、実際にコンドームなどの使用もしていない。もしかして感染したのではないかという感染不安相談は今年度も多かった。また、妻に陽性であることを隠しているが子どもが欲しいので陽性であることを話そうと思っている妻への感染のリスクはないのか妊娠や出産は大丈夫なのか相談の返事内容で決めたいという相談もあった。また、内服しても治ることが無いことを思うと自傷行為をしそうで不安である。など困難な事例もあった。他にも、障害者手帳交付まで治療を遅らせても良いのか心配、また社会制度について知りたい、帰国後に病院に受診するので病院情報を知りたい、薬の飲み合わせについて等もあった。継続のメールの中には結婚後に陽性がわかり離婚となったが息子が前向きに生活を始めたなどの母親からの報告もあった。

相談内容の問題を明らかにして医師やソーシャルワーカー、薬剤師などに繋ぐことが出来た。SOSOSO 相談は医療の専門家の適切で正しい情報を得られる事ができる。その中で自分の決断へ繋がり新しい生活に進むことが出来ている。

3-2-2) HIV 陽性者の同行/訪問支援「そよかぜ」

活動開始年：2015 年
活動内容：エイズ拠点病院や訪問看護ステーションと共同して独居患者が自立出来る様に経過訪問支援などを行なう。介護保険などの公的支援が適応しない支援を提供している。家族が通常行うことを期待されている病院同行、入退院の支援、散歩や買い物等への同行、などである。日常的に必要なとする場面で支援を提供することを長期的に行うことを通して信頼関係を築き、いざとなった時に頼ってもらえる存在となることを目指す。
メンバー：看護師 1 名、ボランティア 1 名で活動している。計 2 名
活動頻度：必要に応じて随時
会議開催頻度：訪問/同行時に随時

そよかぜは、エイズ拠点病院や訪問看護ステーション等と共同して陽性者の独居者が自立できる様に支援を提供している。メンバーは看護師 1 名、とボランティア 1 名である。そよかぜ支援者の活動内容は、独居、高齢化による認知機能低下や病状の悪化にて病院診察を一人で受診する事ができない方の病院同行、訪問から病院受診同行や話し相手が主な活動支援となっている。

そよかぜの同行、訪問の活動件数は 2025 年 9 件であった。地域支援との共同に関しては、病院のソーシャルワーカーや訪問ステーション担当看護師と電話にて情報を共有しながら個々に合う支援の方法を整えることができた。また、訪問ではなく 2 週間に 1 回のライン、3 カ月おきに電話での元気確認の継続を行っている。実施件数は 78 件であった。

話し相手の内容は、高齢や独居の身近に頼れる人がいない現状から起こる孤立を防ぎ、繋がりを継続していくことで、不安から安心した日常生活ができることである。地域の訪問看護師や病院の看護師とは同行支援後に、訪

問看護からは日々の訪問活動の中で気が付いたことなどの情報を共有しながら問題解決に向けた意見交換を行った。しかし今回は高齢者の終焉後の希望を聞くことが不十分であったために本人の希望通りにできなかった事例もあった。

訪問目標は引き続き「繋がり」をキーワードとして、支援者の個々に合った支援方法を考え、訪問看護ステーションや地域との繋がりを持ちながら、公では出来ない家族的支援活動を行っていきたい。

2025年2月には大阪市総合医療センターからの訪問看護師：2名の「訪問看護師への研修会」を実施し陽性者支援や外国人支援の現状について研修を行った。

3-2-3) カウンセラー派遣

エイズ専門相談支援事業 (大阪市)

開始年：2002年

目的：

- 1) 大阪市内で行なっている HIV 検査後に検査結果が陽性と判明した人にカウンセリングを行い、必要とする情報を提供することで、不安を軽減し診療に向かうことを目的とする。
- 2) 大阪市立病院で通院又は入院治療を受けている患者の要望に応じてカウンセリングを行う。
- 3) 中央区、北区の保健福祉センターで月 2 回ずつ HIV 検査時に受検者に HIV をはじめとした性感染症等の相談の機会を提供する。

登録カウンセラー：臨床心理士、ソーシャルワーカー、看護師、計 5 名

頻度：必要に応じて随時

委託元：大阪市保健所

CHARM では、大阪市からの委託で中央区、北区の 2 保健福祉センターで各月 4 回ずつ HIV、STD 無料検査時の定例相談に定例専門相談員を派遣している。2025 年度、保健福祉センターの陽性告知及び定例相談、病院でのカウンセリングの合計件数は、2024 年 58 件 2025 年は 62 件である。病院でのカウンセリングは外国人 2 件であった。(内 1 件は来院変更)また外国人に関してはカウンセリングできる通訳者が対面できる形が有効と思われる。通訳は 2024 年度中国語 1 名、英語 2 名であった。2025 年度は、英語 2 件、スペイン語 1 件、ベトナム語 1 件、告知対応件数は、2024 年 13 件 2025 年は 16 件であった。内、告知に来所しなかった件数が 1 件あった。

外国人の告知カウンセリングでは、母国で受けていた内服薬を日本で継続したいが、どのようにして病院に繋がるのか分からず、日本に在住の同母国人の情報で病院に繋がる手段として、公的な保健センターにて無料検査を受けることが出来る。健康保険証があれば病院での受診や身体障害者手帳交付など社会制度が受けられる事を知り検査に来たと話している。

外国人で保険証がない人には、保険証を作成するところから説明をし、無事に病院へ繋がり治療を受けることに繋がった。外国人就労者の対応としては日本に入国前から医療にかかわる社会制度、治療に繋がるための説明などが必要である。また外国人への無料採血情報の分かりやすい広報も必要である。HIV 陽性者であることで差別や偏見を受けることなく、心身ともに健康に就労できる環境を整える必要がある。また保健センター定例相談の相談内容では男女を問わず STI に感染するという危機感の希薄や感染予防を相手に伝えられない人がいる。その後感染不安が増大して無料採血を受検する人もいる。また SNS で不特定多数の性交を利用している人もおり、梅毒、ヘルペスなど感染力の強い STI 感染の蔓延も注視する必要がある。共に今年度避妊薬のノルレボが薬局で購入可能となった。望まない妊娠を防ぐために必要である半面予防せずに STI 感染者が増えるのではないかと懸念する。学校での性教育の充実に期待したい。

和歌山県エイズカウンセラー派遣事業

活動開始年：2020年

目的：和歌山県立医科大学付属病院にて、エイズ患者または HIV 感染者およびその家族に対するカウンセリングを行う。

頻度：月4回

委託元：和歌山県

2025年度は月4回、計48回の派遣を実施し、対応件数は延べ11件だった(2024年度8件)。2026年度は派遣先をこれまでの保健所やその他の拠点病院に加えて、陽性者が通う和歌山県内の医療機関に拡大し、引き続き派遣する予定である。

4) グループプログラム

4-1) 女性陽性者交流会

活動開始年：2007年

目的：女性 HIV 陽性者が、同性の仲間と出会うことで孤立を防ぎ安心して暮らすことに繋がる機会をつくる。

活動内容：年に一度1泊2日の多文化キャンプを実施し、女性 HIV 陽性者や医療者に出会う機会を作ってきた。2020年度からはオンライン形式の女性交流会を開始し、現在も継続している。

開催頻度：多文化キャンプは年に1回、オンライン女性交流会は約2ヶ月に1回(曜日、時間は不定)

委託元：厚生労働省 HIV 陽性者等の HIV に関する相談・支援一式

女性 HIV 陽性者交流会は、女性陽性者同士が出会い、つながるピア(仲間)の場である。

今年度の多文化キャンプは、関西や関東、九州に住む HIV 陽性女性 12 名(うち外国籍 3 名)、およびその子ども 10 名(乳幼児 3 名、小学生 6 名、中学生 1 名)と、スタッフ 9 名(医師 1 名、薬剤師 1 名、医療ソーシャルワーカー 2 名、看護師 1 名、支援者 4 名)が参加した。また同プログラムは、京都 YMCA の協力のもとボランティアリーダー 4 名が子どもプログラムを担当した。二日間のプログラムの中で女性たちは、医療者との個別相談で日々の悩みを解消し、座談会では医療や最新の治療、制度に関することなど様々な質問を投げかけたが、それぞれの専門家が回答することで、参加者全員が最新の情報や動向などを共有することができた。今回はすでに顔なじみのメンバーの集まりとなったが、お互いの近況報告や、体調の変化など病気以外に共通する悩みを語りあったり、将来への不安を話す参加者もいたが「ひとりではない」と思える時間を持つことが、女性たちの安心感に繋がっている。

オンライン交流会は、今年度は合計4回開催した。参加者は延べ人数 26 名で、そのうち外国籍女性 3 名であった。近況報告とその場で出たトピックに沿いディスカッション形式で行うものを実施したが、毎回 5~7 名の参加者があり、日々の生活の中で感じたことや悩みなどを共有して他者からのアイデアや情報を得て、安心していろいろな話ができる場となった。

また今年度は石川県の北陸 HIV 情報センター(HHC)と協同し、東北在住の女性支援を実施した。電話や SMS でのやり取り、また本人の二度の来阪による対面カウンセリングで心理的サポートを行ってきたが、遠隔での支援の難しさや限界もあり、HHC で対面支援を実施したところ、自分の住む場所に少しでも近いところに、支援を求める場所があることを心強く感じたようであった。他の女性との交流も希望されており、次年度に向けては HHC とともに女性交流会の地方開催を実施することを検討している。

実施回数：多文化キャンプ 1 回、オンライン交流会 4 回、地方個別支援 1 回

参加人数：多文化キャンプ 12 名、子ども 10 名、医療従事者 6 名

オンライン交流会延べ 26 名

地方個別支援 1 名

4-2)薬物依存症からの回復を目指す HIV 陽性者のピアグループ SPICA

活動開始年：2012 年

活動内容：HIV 陽性者で薬物依存症からの回復を目指したい人たちが集まる仲間(ピア)のグループミーティング。HIV、セクシュアリティなど互いに理解し合える要素を共通にもつ仲間が、お互いを支え合うためにつながる場としてピアグループミーティングおよび学習会がある。

開催頻度：第 2 日曜日、第 4 土曜日 16:00-18:00 に開催。

委託元：厚生労働省 HIV 陽性者等の HIV に関する相談・支援一式

2025 年度は、23 回実施し、延べ 53 人が参加した。年度の後半には新しいメンバーが 2 人増えた。仕事の都合や親の介護などで継続して長いメンバーが毎回参加することが難しくなっているが、都合をつけて数か月に一度でもミーティングに参加し、新しいメンバーを励ましたり、自分自身もリフレッシュしたりできているように見受けられる。来年度はミーティングから離れてしまっているメンバーが再度参加するためのきっかけとなるようなイベントもしていきたいと考える。

運営はスタッフ 2 名、ボランティア 1 名。

4-3) つむぐ

活動開始：2023 年 6 月開始

主旨：

高齢化が進む中、「そよかぜ」とかかわりを待つ陽性者の方々も昨日まで出来ていることが出来なくなっている身体の現状や、物忘れや理解力の衰えなど認知機能が低下している事に気が付く日々が増えている。第三者には実感として理解しにくい身体的、精神的な「老い」を感じながら、その不安などを誰にも話すことが出来ずに生活を営んでいる人々は多いと考える。さまざまな不安を抱える高齢者の方々が集まって、共に語り合う事で老いることへのそれぞれの不安を受け止める事ができ、個の問題を前向きに捉えることができるのでないだろうか。また、繋がる中で一人ではない事が実感でき、今後の Q O L の向上にも繋がると考えた

目的：

1. 語ることがエンパワーメント効果となり、老化する現状を受け入れることができる。
2. 他者とのつながりを持ち、一人でないことを感じることができる。
3. 不安から安心へ変化することができる。

※参加者・スタッフが固定ではないため自己紹介は毎回実施：近況報告から始める。

終了後は、毎回スタッフによる事前打ち合わせと準備、事後まとめと反省会を実施。

守秘義務：「つむぐ」での話を口外しない等グラドルール作成その都度開始前に話す。

2023 年 10 月より開始し 2025 年で 3 年を迎えたが、参加者の入院などが伴い、活動は縮小した。集いは 5 月に 1 回のみ開催となった。その後参加者の不幸もあり一旦中止することになった。

メンバー：看護師 1 名、ボランティア 1 名で 2 か月に 1 回の活動。

5) 多言語支援

5-1) HIV と結核の医療通訳事業

活動開始：2002 年

活動目的：日本語以外の言語を背景とする人が、医療機関、保健所などで自分が理解できる言語で安心して診察を受けるために医療通訳を実施する。

活動内容：

1) HIV 通訳

内容：HIV 陽性者の診療時、行政窓口やその他の手続きの際の通訳（同席、電話、遠隔映像）

委託元：厚生労働省、患者自己負担

2) HIV 検査時通訳

内容：自治体、NGO 等が行う HIV 検査、結果返しの際の通訳(同席、遠隔映像)

委託元：京都市、MASH 大阪、スマートらいふネット、大阪市、大阪府、杏林大学

3) 結核通訳

内容：結核感染者の受診、接触者検診、DOTS 指導、濃厚接触者等に関する聞き取りの際の保健師と患者の間の通訳(同席、遠隔映像)、資料翻訳

委託元：大阪府、堺市、八尾市、寝屋川市、枚方市、吹田市、高槻市、京都市

4) 結核患者のため結核治療専門医療機関での医療通訳システムを構築

内容：医療通訳者を派遣し、通訳者が介入したことによる効果について医療者の評価を得る。

助成元：大阪コミュニティ財団

5) 契約以外の医療通訳

内容：交通事故、インタビュー、HIV 陽性者の受診時等

依頼元：伊勢赤十字病院、北陸 HIV 情報センター、名古屋市立大学河津さんプロジェクト等

財源：保険会社など

6) 医療通訳研修

内容：登録通訳の知識更新のため、また新規の通訳者採用前の基礎知識習得のために実施

委託元：杏林大学

登録通訳者：82 名 (22 言語)

5-1-1) HIV 医療通訳事業

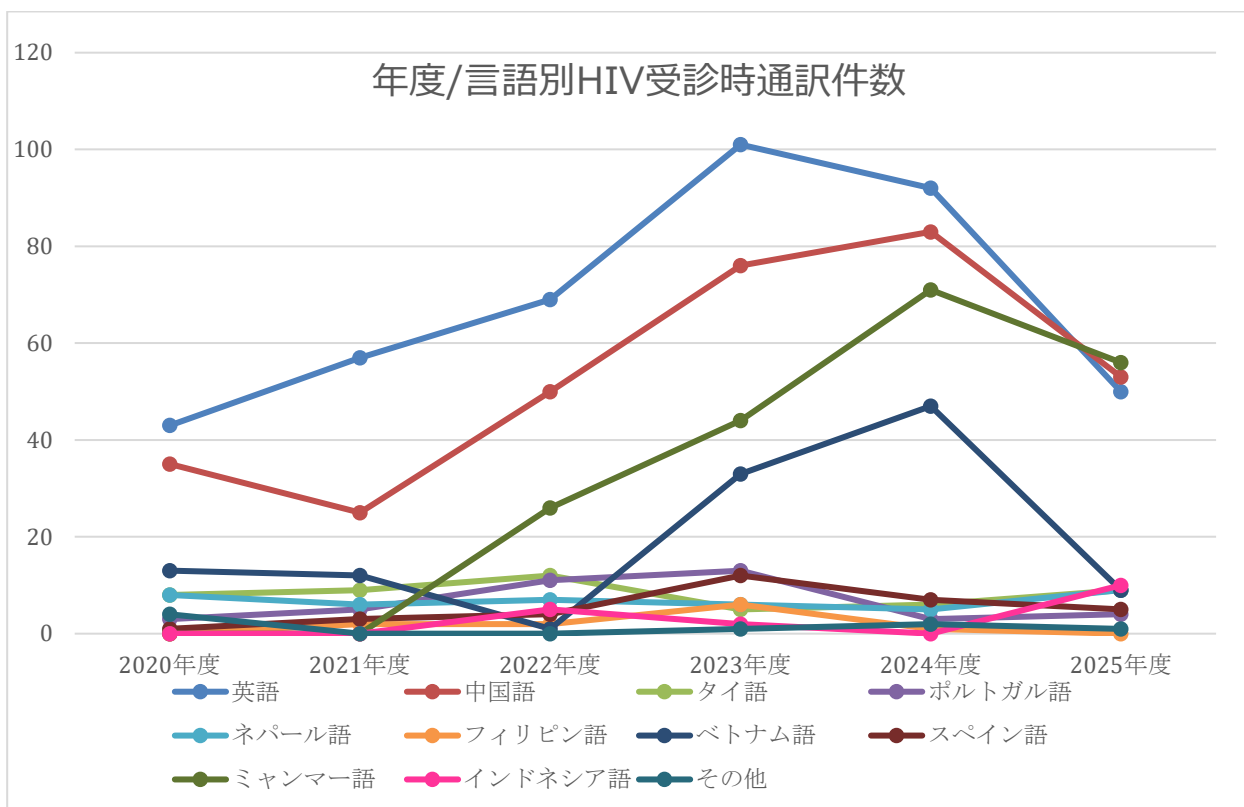
2025 年度の HIV 陽性者通訳実施件数は 206 件。厚労省の受託事業 178 件、陽性者個人からの依頼 28 件。2025 年度より基本的にこの事業の対象者は通訳開始から 1 年以内のものとしたこともあり、件数が 2024 年度の 317 件から大きく減少した。1 年間で受診の流れ、医療施設の設備などを受診の際に通訳者と一緒に学んでもらう。また、病状の変化、在留資格/保険/引っ越し等手続きが必要な際などは 1 年を経過していても事業の対象としている。また 1 年を過ぎても通訳を希望する陽性者個人からの依頼を受け有償で実施した。

同席通訳 157 件、遠隔ビデオ通訳は 42 件、電話通訳は 7 件行った。2024 年度の遠隔ビデオ通訳 36 件、電話通訳 13 件から増減している。陽性者個人の通訳は全て同席通訳であった。

わかっているだけで 23 の国や地域出身者に対して通訳を実施。出身国はミャンマー 56 件、中国 49 件、ネパール 16 件、インドネシア 13 件などであった。言語別で見るとミャンマー語 56 件、中国語 53 件、英語 50 件、合計 10 言語で対応した。2025 年度の新規は 37 ケース、延べ 114 件、継続 36 ケース延べ 64 件であった。新規依頼は医療機関からの依頼が 15 件、相談から通訳依頼に至ったケースが 12 件、HIV 検査の陽性告知通訳時に本人が希望したケースが 9 件、本人からの依頼 1 件であった。検査結果返却時に陽性であった場合、受診時の通訳を CHARM に依頼したいと希望した場合、スムーズに通訳者の調整に至るよう HIV 検査会場での通訳事業と連動して対応を進めている。

言語別通訳実施回数：

言語	英語	中国語	ミャンマー語	ベトナム語	スペイン語	ポルトガル語	タイ語	ネパール語	ロシア語	インドネシア語
件数	50	53	56	9	5	4	9	9	1	10



医療機関別に見てみると、29名に対応した大阪医療センターでの通訳件数は延べ92回、16名の大阪市立総合医療センターでは延べ46回、6名の都立駒込病院(遠隔/映像通訳)は延べ14回の通訳を実施した。京都大学医学部付属病院、九州医療センター、大阪医科薬科大学病院など合計22医療機関と2行政機関(市役所等)、患者宅で通訳を実施した。

利用者と事務局の間の連絡を円滑化するために導入したLINE公式アカウントには46名が登録し、受診日の変更、予定の変更、受診までに用意または持参すべき書類などの確認を行っている。本事業終了後もLINEに連絡があれば相談担当が資格申請や引っ越しなどの生活の変化の時期に対応している。

また、昨年度から開始したスーパーバイザーや相談担当スタッフとの月1回ケース会議で問題点の洗い出し、対応の検討を行っている。

HIVの治療を行う感染症科以外では眼科、循環器内科、消化器内科、婦人科、産婦人科での通訳のほか、出産に至ったケースもあった。

1.医療通訳実施回数：206回

2.対応言語：英語、中国語、ベトナム語、フィリピン語、タイ語、ネパール語、ポルトガル語、スペイン語、ミャンマー語、ロシア語

5-1-2) HIV 検査通訳事業

① 京都市平日検査

2025 年度は京都工場保健会へ月 2 回、昼検査と夜検査に英語通訳者を派遣した。46 回派遣し、105 回の通訳を行った。予約したにもかかわらず来場しなかった受検者、定期的に受けに来る受検者が散見された。

② dista でピタッとちえっくん

MASH 大阪が隔月に実施しているコミュニティーセンターdista でのゲイ・バイセクシュアル向けの HIV 検査において英語、中国語の通訳者が Zoom を使った遠隔映像通訳を行うため年 6 回スタンバイしたが、通訳を必要とする受検者が少なく、英語通訳を 2 回、中国語通訳を 1 回実施。1 週間後の検査結果返却時には同席で英語を 2 回、中国語を 3 回実施した。

③ chotCAST HIV 検査会場

2025 年度は基本第一日曜日の検査時に中国語、ベトナム語の通訳者を派遣した。検査時通訳実施数は中国語 16 件、ベトナム語 8 件、合計 24 件であった。このほか、結果返却時の通訳を中国語 3 件、中国語、ベトナム語、ミャンマー語を各 2 件、英語を 1 件(そのほか 1 件は未来場のため通訳実施せず)、合計 10 件実施した。こちらの会場も予約をしても来場しない受検者が一定数いた。

④ 杏林大学 HIV 検査

厚生労働省の研究事業¹⁾の一環で研究班代表の在職する杏林大学と契約を結び、HIV/STI 検査イベントや、自治体の HIV 検査時の遠隔映像通訳を実施した。自治体の依頼で結核に関わる保健所の依頼も受けたが、保健師と対象者がすれ違いとなりたい気に終わった。北海道、群馬県、東京都、神奈川県、静岡県、大阪府、福岡県、宮崎県、沖縄県の医療機関や保健所など 14 会場の予約要、不要なイベント検査時に延べ 46 回の依頼を受け、英語 17 件、インドネシア語 8 件、ベトナム語 6 件、中国語 4 件合計 35 件の通訳を実施した。こちらの事業でも検査を予約しても来所しない受検者がおりこのような数となった。

⑤ 大阪市保健所が実施している HIV 検査実施後の陽性告知時の通訳派遣は英語、スペイン語、ベトナム語各 1 件実施。その後の受診時の通訳を厚労省の事業で継続して行ったケース 2 件、うち 1 件は現在も通訳を実施している。

⑥ 大阪府保健所から受託事業として、医療機関で HIV 陽性が判明した際の告知時に医療通訳を期間限定で派遣することになっていたが、こちらの事業は中止となった。

2025 年度 HIV 検査時医療通訳実績(件数)

HIV 検査	検査/結果返し依頼元	英語	中国語	ベトナム語	インドネシア語	ミャンマー	スペイン語	合計
		京都市保健所(46 派遣)	105	0	0	0	0	0
MASH 大阪(12 待機/5 派遣)	4	4	0	0	0	0	8	
スマートらいふネット(37 派遣)	1	19	10	2	2	0	34	
杏林大学(44 待機/2 派遣)	17	4	6	7	0	0	34	

大阪市保健所	1	0	1	0	0	1	3
HIV 検査関連通訳実施合計	128	27	17	9	2	1	184

(合計 184 件)

5-1-3) 結核通訳事業

2025 年度の結核通訳は 8 つの自治体と契約をしていたが、そのうち大阪府、堺市、八尾市から依頼を受け計 31 件実施した。2024 年度は 41 件であった。

結核治療のために入院中の患者に対して、結核治療の理解の確認と今後の保健師の支援計画についての説明、患者や家族への聞き取り調査や接触者検診、自宅、職場での DOTS 指導、帰国に向けた聞き取りなどの通訳を行なった。

大阪府内結核通訳実施先別言語別実績(件数)

依頼先	通訳実施先	英語	中国語	フィリピン	ベトナム	ミャンマ	インドネ	ネパール	タイ語	台湾語
大阪府	近畿中央呼吸器センター	3	1	0	0	0	0	1	0	0
	大阪はびきの医療センター	0	0	0	0	0	4	0	0	0
	大阪複十字病院	0	0	0	0	4	0	0	0	0
	白井病院	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	大阪公立大学医学部付属病院	0	0	0	0	0	2	1	3	0
	和泉保健所/茨木保健所	1	0	0	1	0	0	0	0	0
	患者職場	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	患者自宅	0	0	0	0	0	1	0	0	0
堺市	大阪はびきの医療センター	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	大阪府結核予防会堺複十字診療所	0	1	0	1	0	0	0	0	0
	つじもと内科クリニック(遠隔/電話)	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	日本語学校	0	0	0	0	0	0	1	0	0
八尾市	八尾市保健所	0	1	0	0	0	0	0	0	0
京都市	右京区役所	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	合計	4	4	1	2	5	7	4	3	1

(合計 31 件)

5-1-4) 契約以外の医療通訳

2025 年度は、大阪市立総合医療センターの依頼で肺がん患者 1 名にベトナム語での通訳支援をおこなった。

HIV 陽性者の通訳としては伊勢赤十字病院の依頼で遠隔 Zoom でインドネシア語、タイ語各 1 件、北陸 HIV 情報センターの依頼で同席英語 1 件、名古屋市立大学院生のプロジェクトで薬に関する調査の同席通訳をネパール語、中国語各 1 件、昨年度から継続している交通事故に遭ったフィリピン人ファミリーのためフィリピン語通訳や翻訳など 77 回対応した。費用は交通事故の保険会社が負担。通訳の内容は形成外科、眼科、心療内科などでの受診時、視覚障がい者向けの白杖、パソコン、スマホ、調理や後片付け、外出などのリハビリ実施時など多岐に

わたった。また、件数としては関西学院大学の事業としてカウントされているのでこちらには入らないが、難病と診断された学生のための通訳も告知の場面、自国にいる親との場面、帰国後のケアのための準備の場面などで寄り添った通訳が実施できたことも付記しておく。(合計 83 件)

5-1-5) 医療通訳者研修

HIV／結核通訳研修の通訳養成講座を開催し、Zoom をつかった 4 回の通訳研修を行なった。2025 年度の医療通訳研修も、2019 年度から続いて杏林大学北島勉氏を代表とする研究事業¹⁾の一環として実施した。

研修日程： 1) 9 月 23 日 9:00-13:00 2) 10 月 25 日 9:00-13:00
 3) 11 月 29 日 9:00-13:00 4) 12 月 20 日 9:00-13:00

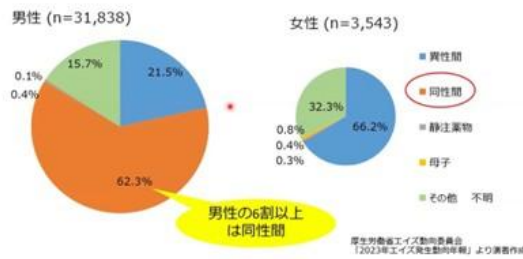
保健所、医療機関などから外国人の感染症患者(結核とエイズ)を支援するための通訳を行う医療通訳者を養成するための研修を開催した。新規登録希望者、及びすでに CHARM に登録している医療通訳者を対象都市、近年増加している多様な言語に対応できる人材を養成するために日本語以外の言語を母語とする人々が参加しやすいプログラムとした。結核、HIV、HIV 検査に関わる知識を身につけ、それをもとに担当言語と日本語の用語集を作成する。毎回の講義を通し単語の数を増やし、用語集を作成する習慣を身につける。その用語集を用いてロールプレイで実践しながらの通訳役を務めることで、通訳者としての経験を積み、評価を受ける。研修終了後、受講者の中から 6 名の通訳登録が完了し、今後も登録作業を進めていく。

言語別参加者： 英語 5 人、中国語 3 人、ベトナム語 2 人、英語/ベトナム語 1 人、フィリピン語 2 人、フィリピン語/英語 2 人、インドネシア語 2 人、ネパール語 2 人、英語/中国語 1 人、ミャンマー語/英語 1 人、ベトナム語/中国語/広東語 1 人、計 22 名。延べ 62 人。4 回出席 8 名。

研修内容

- 1.HIV の基礎知識：白野倫徳(大阪市立総合医療センター)
- 2.結核の基礎知識：高柳喜代子(結核研究会)
- 3.HIV 検査の流れ：古川香奈江(大阪市保健所)
- 4.理解を確認するためのテスト及び、回答内容から不足している知識のフォロー
- 5.通訳練習とグループ(クイックレスポンス、リプロダクション、ノートテイキング)；宮首弘子、
- 6.医療通訳者のセルフケア：村松紀子
7. HIV 検査後の陽性告知のカウンセリングと通訳：山中京子
- 8.HIV に関係する保健医療制度：瀧浦その子(大阪市立総合医療センター)
- 9.結核に関係する保健医療制度：儀保雅代(大阪府健康医療部保健医療室感染症対策課)
- 10.外国籍住民が利用できる保健医療制度：青木理恵子
- 11.理解を確認するためのテスト及び、回答内容から不足している知識のフォロー
- 12.医療通訳の倫理と役割 1：沢田貴志
- 13.医療通訳の倫理と役割 2：村松紀子
- 14.HIV 検査時、結果返し(陽性告知)場面での受検者と保健師の間の通訳(ロールプレイ、ベトナム語/英語/フィリピン語)
- 15.通訳困難場面での対処方法

感染経路別 かんせんけいろ (2023年末現在・全国・累積)



脚注 ¹⁾ 厚生労働省在留外国人に対する HIV 検査や医療提供の体制構築に資する研究班・研究事業、研究代表杏林大学総合政策学部教授北島勉

5-2) 翻訳事業

主に行政機関から結核などに関連する資料の翻訳などの依頼があり対応した。実施した翻訳内容は下記の通りである。

依頼元	内容	言語
chotCAST	HIV 検査の結果返し用紙の翻訳のチェック	ベトナム語
自治体(大阪府)	結核関連チラシ	中国語
自治体(大阪府)	結核関連文章、案内	ミャンマー語、中国語、ベトナム語、タガログ語、インドネシア語、ネパール語、英語
自治体(大阪府)	結核、接触者健診時の説明資料	英語
相談事業 (厚労省予算)	相談者への対応	中国語

6) 関西学院大学留学生の生活医療支援

<p>活動開始年：2023 年</p> <p>活動目的：留学生が日本で健康に勉学に取り組むため、学外での支援の一助となる。</p> <p>活動内容：1) 大学保健館における学校医との面談時通訳 2) 病院同行/通訳 3) 授業に出来ない学生の安否確認 4) 障害を持つ学生の役所への手続き同行/通訳</p> <p>開催頻度：必要に応じて随時</p> <p>委託元：関西学院大学</p>
--

今年度は、延べ 59 件の通訳・同行支援を実施した。診療科は精神科/心療内科、神経内科、内科(循環器内科、消化器内科含む)、整形外科、皮膚科、泌尿器科、婦人科、眼科、耳鼻咽喉科等であった。健康面に配慮を希望する交換留学生は来日後すぐに大学保健館で看護師と面談を実施し、希望する学生には CHARM が通訳として介入している。事業開始当初より新学期が始まってすぐは母国からの治療を継続するための発達障害、精神疾患に関する通訳がほとんどだが、学期途中から日本での生活の中で体の不調が出現し精神科/心療内科以外への同行通訳を実施する件数が増える傾向である。今年度は、来日後に不調になり医療機関で精査したところ難病と診断された学生がいた。より専門的な通訳が求められる場面では CHARM の登録通訳者へも協力を仰ぎ、学生が安心して治療に専念できるようサポートした。また、正規留学生への対応も引き続き実施している。今

年度は医療機関への同行通訳以外に本人宅への安否確認、入国管理局への同行も行った。

引き続き大学側と連携しながら留学生が健康に日本で過ごせるよう支援をしていく。

7) ネットワーク

7-1) 大阪エイズウィークスの一環として、CHARM が毎月実施しているブッククラブ(読書会)を広く広報し、会場も劇場である扇町キューブの談話室まちそわで開催した。

日時：2024年12月13日 11:00-13:00

にこの日読んだ本はパク・サンヨン著「大都会の愛し方」参加者7名。

7-2) 関西 HIV 臨床カンファレンス NGO/NPO 交流会に参加。

日時：2026年3月17日

医療機関と支援団体が同じテーブルで意見交換をするこの場には、医療と市民団体が近い関西の特徴を表しており大阪、兵庫、奈良の3医療機関から6名、京都、大阪、兵庫の6つの NGO/NPO から6名、大阪府感染症1名、地域で HIV を診療するクリニックから1名が参加した。2017年から「にじいろ商店街」として再スタートしたこの集会は、立場を越えてこの場で出会うことをきっかけとして様々な連携が生まれつつある。

8) 広報

8-1) 10 言語ホームページ、SNS での情報発信

ホームページ、SNS にて継続的に実施予定のイベントや関西圏内や全国の外国語対応する検査情報などの発信を行った。2025年度のホームページの閲覧数の年間平均は32,000/月だった(2024年度は9,900/月)。

8-2) ホームページを通じた相談

医療や社会制度についての情報を日本語以外の言語で得ることが難しい日本で CHARM のホームページは、10言語で情報提供をしているため様々な言語話者の利用と問い合わせがある。

2025年度も日本国内及び海外からの問い合わせや相談が寄せられた。ホームページの問い合わせフォームを通じての問い合わせ件数は96件であった(2024年度も同数の96件)。その内、HIV陽性者からの問い合わせについての件数が62件であった(2024年度は71件)。問い合わせの内容は、「(来日前)HIV陽性者の日本における医療制度、治療継続、医療機関情報」25件(26%)、「(来日後) HIV陽性者の日本における医療制度、治療継続、医療機関情報」22件(22.9%)、「(来日前) HIV陽性者が日本入国可否、生活全般、留学、仕事ができるかどうかについて」11件(11.8%)、「日本語プログラムの参加などについて」3件(3.1%)、「海外 HIV ネットワーク情報」1件(1%)であった。

上記以外のその他の問い合わせが34件であった。内容は「ボランティア参加の希望」8件(8.3%)、「HIV検査情報」5件(5.2%)、事務局対応等21件(21.8%)であった。

HIV陽性者の使用言語は英語35件(56.5%)、日本語8件(12.9%)、インドネシア語7件(11.3%)、母語ではないが日本語6件(9.7%)、ポルトガル語3件(4.8%)、中国語2件(3.2%)、そしてタイ語1件(1.6%)であった。HIV陽性者からの問い合わせの中に、母語が外国語の方の割合が高く87.1%であった。

アクセス元は海外からが35件(56.5%)、日本国内からが26件(41.9%)、場所不明が1件(1.6%)であった。

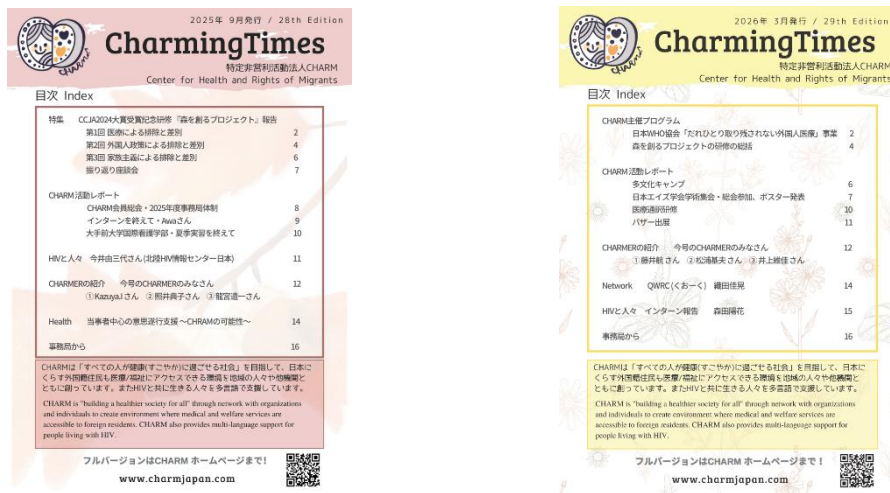
海外からの問い合わせが若干多いが、日本に就労や就学のために来日することがわかってから来日前にそして日本に来てから HIV 治療を継続するために必要な手順や必要書類また医療機関などに関する情報を求めている人

が多いことを表している。一方日本では HIV 陽性者が HIV 診療を継続するために必要な情報提供と相談窓口は極端に少ない。CHARM はその中で重要な役割を担っていることを自覚しており、2026 年度も引き続き、海外や日本国内から情報を求める外国人 HIV 陽性者に提供する情報を充実していく。

また CHARM がエイズ拠点病院において周知されるようになってきたことにより医療機関からの問い合わせも増えていることから、2026 年度は外国人と医療従事者の両方が必要としている情報の提供の方法を検討する。

8-3) CHARM からの情報発信

CHARM の機関紙である「Charming Times」の発行を年 2 回行った(28 号、29 号)。団体の機関紙は、一般に公開し、誰でも、どんな端末からでも閲覧しやすいように HP に文章、写真、イラストなどを使い、読みやすいように工夫した。一方、PDF 版もホームページからダウンロードできるようにした。紙媒体を希望する方やインターネットにアクセスがむずかしい方に配布できるように印刷物も作成した。



また、CHARM に関わるすべての人を「CHARMER」と呼び、事業やイベントの案内を「charmer ML」として 2025 年度も月 1 回の配信を行った。毎月配信されるニュースを受け取り、その時に動いている活動について情報を得ることができる。配信を受け取る CHARMER は、CHARM 会員、サポーター(賛助員)、活動メンバー、スタッフ、理事などである。

9) 実習・研修受け入れ

日時	主催機関・対象者	実施内容	参加者数
2025 年 7 月 28 日～8 月 1 日	大手前大学国際看護学科	夏季実習 NPO/NGO の地域活動を学ぶ 外国人対象の STI 予防啓発ポスター作成を通じての学び	6 名
2025 年 10 月 7 日	大阪医療センター	HIV 感染症実施研修 NPO/NGO 施設訪問と講義	4 名
2024 年 9 月 7 日～2025 年 6 月	アメリカ セネガル	マイノリティの健康課題に NGO がどの様に 対応しているのかを中心に研修する	1 名

2025年2月20日	大阪市総合医療センター	訪問看護師への研修会 CHARM 陽性者支援の実情(外国人の現状についても含む)	2名
2025年5月8日 ～1月15日	同志社大学社会学部社会福祉学科学生	社会問題実習 地域のソーシャルワーカーの役割について	1名

10) 理事会

理事長	松浦基夫
副理事長	武田丈
理事	エレラ・ルルデス・ロザリオ、川奈奈央子、白野倫徳、福村和美、中萩エルザ
監事	磯辺和也

第1回理事会 拡大理事会 (理事・監事と事務局の合同会議)

日時：2026年1月10日(土) 14:00-17:00

会場：エル大阪(大阪府立労働センター) 707号室

参加：理事6名、委任出席1名、監事1名、職員7名 合計14名

議事：I 2025年度事業の中間報告

II CHARMの中長期的事業展開を検討する

2025年後半から2年半実施する休眠預金事によって2026年4月から正職員1名を雇用し、事業体制を強化する。事業終了後も事業体制を継続していくための事業展開について意見交換を行った。

III 認定NPO法人資格申請手続きを進めている。今後寄付の多様化の工夫が必要。

IV 2027年のCHARM25周年のプログラムについて意見交換

V 2026年CHARM会員総会を2026年6月6日14:00-16:30に開催する。

VI 会を代表する理事長を二人体制とし、医療と社会の各方面の2人の合議で進める。

第2回理事会

日時：2026年3月30日 19:00-20:15

手段：オンライン

参加：理事6人、委任出席1人、監事1名

議事：I 2026年度事業計画案 承認

II 2026年度予算案 承認

III 2026年度組織図 承認

IV 会員総会に提起する定款変更案 承認

V 拡大理事会で協議したCHARMの中長期的事業展開は、各分野で実現性を検討し、2027年の拡大理事会で協議する。

11) 会員総会

日時：2025年6月7日(土) 第一部 14:00-14:30 第二部 14:30-16:25

参加形態：第一部、第二部ともに、対面とオンライン参加

会場：在日大韓基督教会大阪北部教会 1階集会室

第一部：総会

正会員 41 名のうち 17 名出席 委任状 18 名 合計 35 名 正会員過半数をもって総会成立

議事：第 1 号議案 2024 年度事業報告の件、第 2 号議案 2024 年度決算報告の件、第 3 号議案 2025 年度事業計画および活動予算案の件、第 4 号議案 監事の就任の件、の全てが全員異議なくこれを承認し、可決された。第 4 号議案では、これまで監事の三保俊幸さんが退任され、磯辺和也さんが就任された。最後に第 5 号議案として議事録署名人 2 名(オンバダ香織、竹野翠)選任された。

第二部：フォーラム「これからの CHARM ～次世代にバトンを繋ぎ、私たちが理想とする社会の実現を目指すには～」

対面参加者：正会員 17 名、サポートやスタッフ 17 名、オンライン参加者：6 名、合計 40 名

最初に事務局のオンバダから CHARM の存在意義を中心に、それまで開催された拡大理事会で話し合われた内容を報告した。

そのあと、事務局の竹野から、今後の 20 年に向けて、・これまでと変わらず「人」を真ん中にした活動、・差別や偏見を無くすための社会へのアプローチ、・団体を継続していくため経済的な安定を目指す、ことについてから検討する必要があることの説明を行なった。

そして、最後にグループに分かれ、ディスカッションを行った。



12) 事務局

青木理恵子 (事務局長、理事会、渉外)

庵原典子 (通訳派遣、通訳研修)

ブラーボンキワラシ (広報、外国語によるエイズ電話相談)

オンバダ香織 (女性交流会)

前田圭子 (総務、会員)

宮本珠美 (会計、総務)

三田洋子 (エイズ専門相談、そよかぜ、HIV 総合相談窓口 SO SO SO、つむぐ、医療従事者実習受け入れ)

竹野翠 (交換留学生医療・生活支援、外国人陽性者支援、SPICA)

13) 会員

会員数 125 名 (前年比 -11 名)

〈内訳〉

サポーター (賛助 A) 36 名

サポーター (賛助 B) 47 名

正会員 39 名

法人・団体サポーター 3(9 口)

14) 寄付者名簿(敬称略)

○ 一般寄付 個人

青木理恵子、荒巻富美、安間てつ子、今村葉子、岩田秀梅、岩元美和子、宇野健司、
小笠原理恵、奥野有佳、織田幸子、来住知美、川江友二、金香百合、小泉世津子、小林直子、
幸はるか、里中えつ子、重岡奈津子、白野倫徳、関祥子、高井明子、高田由紀子、竹内真由、
田守敏樹、豊島裕子、中路綾夏、中田大三、成田康子、新倉久乃、パスカヴィル ブライアン、
廣瀬景一、藤田圭以子、マーサ メンセンディーク、前田佳壽美、松浦基夫、松岡綾子、
社会福祉法人ミッションからしだね 理事長 坂岡隆司、宮本愛梨沙、三輪敦子、村松紀子、
山口和子、山口樹子、よしだようこ、米本キャサリン、匿名 6 名

○ 一般寄付 団体

一般社団法人ぶろっさむ(つぼみ薬局)

日本基督教団池田五月教会

日本基督教団京都上賀茂教会

日本基督教団大正めぐみ教会

日本基督教団浪花教会澤山会